参加者同士の関わりを目的としたボディパーカッション活動
―宮城県丸森町立丸森中学校に於ける復興支援―

小畑千尋*・佐藤里紗**・水戸まりな***・山崎夏実**・菊地真季子***・八木沼賢悟***

Body Percussion Activities for the Purpose of Communication:
Reconstruction assistance at Marumori Junior High School, Miyagi

Chihiro OBATA, Risa SATO, Marina MITO, Natsumi YAMAZAKI, Makiko KIKUCHI, Kengo YAGINUMA

要約：東日本大震災後に４中学校が再編統合して設立された宮城県伊具郡丸森町立丸森中学校に於いて，参加者同士の積極的な関わりがなされることを目的としたワークショップ「みんなでボディパーカッション！」を 2014 年 11 月 13 日，28 日の２日間実施した。２学年の全生徒と２学年の保護者 56 名が参加し，実施後のアンケート調査の結果からは，生徒が保護者に指導する形態を取り入れたことにより，生徒たちが自己有用感を得たと捉えられる感想が多々みられた。また約８割の保護者が，今まで話したことのない保護者同士で話すことができたことがわかった。今後は音楽による支援としても，参加者主体の，参加者自身の自己有用感を高められるような活動がより求められると考えられる。

キーワード：ボディパーカッション，自己有用感，支援，中学校，再編統合，保護者

１．はじめに

宮城県伊具郡丸森町唯一の中学校である丸森町立丸森中学校は，2011 年東日本大震災から約１年後の 2012 年４月に丸舘中学校，大内中学校，丸森西中学校，丸森東中学校の４つの中学校が再編統合された中学校である。

丸森町の中学校再編については，生徒数の減少により 2007 年には既に検討が始まっていたが，東日本大震災により統合計画が一気に進むことになった。震災の被害で校舎が使用できなくなった丸森東中学校が，丸舘中学校校舎に仮住まいをする形となったからである。2011 年５月 12 日，丸森町臨時町議会において，４つの中学校を１つの中学校に再編し，「丸森中学校」としてスタートすることとする新中学校の設置条例が制定され，翌 2012 年に再編されるに至った。

丸森町は宮城県の最南端に位置する。震災後の東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響により，丸森中学校の校庭には放射線測定器が設置され，継続的な計測がなされている（図１参照）。

図１　丸森中の校庭に設置された放射線測定器

そのような中で４つの中学校が統合されてから２年が経過した。生徒たちの出身小学校は，公立小学校だけでも丸森小学校，金山小学校，筆甫小学校，大内小学校，小斎小学校，舘矢間小学校，大張小学校，耕野小学校の８校から構成されている。このことに関連して，「中学校が統合と

* 宮城教育大学教育学部 音楽教育講座，** 宮城教育大学 中等教育教員養成課程音楽教育専攻，*** 宮城教育大学 初等教育教員養成課程音楽コース

なり，子どもたちは互いに打ち解け仲よく過ごしているが，保護者同士は，つい出身小学校でかたまってしまい，なかなか知り合いの輪がひろがらない」のだという。そのことを少しでも改善するべく，２学年のPTA 委員長から，音楽（特にボディパーカッション）を一緒に行うことで保護者同士が交流するきっかけにしたいという依頼を筆者が受けた。ちなみにボディパーカッションとは，その名の通り，手拍子，足踏み，膝鳴らしなど，身体を打楽器のように捉えて奏でる音楽であり，近年では，教育現場における活用についても数多く報告がみられる（白水ら 2013, 保坂 2013 他）。

音楽教育を専門とする筆者と研究室の学生らにとって，音楽を楽しむという目的のみならず，保護者同士のコミュニケーションを図るために音楽を活用したいという保護者の発想は，大変興味深い提案であった。そこで，保護者同士，さらに生徒と保護者との積極的な関わりがなされるために，それからの約半年間，丸森中学校 PTA，丸森中学校第２学年主任，小畑研究室の３者での打ち合わせを複数回行った。３者それぞれがアイディアを出し合い，最終的なプログラム「みんなでボディパーカッション！」を創り上げた。

実施形態は，筆者らがボディパーカッションを一方的に教えるのではなく，今まで話したことのない保護者同士が話せるための「仕掛け」が必要であると考えた。たとえば生徒が保護者に教える状況になれば，生徒と保護者の会話が促進されるだけでなく，保護者同士が打ち解け，互いに協力するような場面が生まれることが期待できる。

その結果，ワークショップ「みんなでボディパーカッション！」は丸森中学校の体育館で２回実施することになった。まず第１回目のワークショップは，音楽教育を学ぶ大学生が中学生にボディパーカッションを指導する。その後第２回ワークショップまでの２週間は，中学生は自主練習を行う。自主練習については，丸森中学校の教員にサポートをしていただく。第２回ワークショップでは，大学生はファシリテーターとして関わり，主に中学生が保護者にボディパーカッションを指導する。そして最終的には，生徒と保護者全員で１曲のボディパーカッションを仕上げて演奏するという計画である。

本稿では, 復興支援の在り方の一事例として, ボディパーカッションを用いたワークショップの実践を報告し，ワークショップ後に実施したアンケート調査結果の分析を通して，本ワークショップと参加者同士の関わりを中心に検討することを目的とする。

2. 丸森中学校におけるワークショップの実践

1）演奏曲目

演奏する曲は，オルフ・シュールベルクより《リズムのロンド　No.7》を用いることとした。この曲は, 手拍子, 足踏み, 膝叩きの動きを用いたボディパーカッションで，[Ａ - Ｂ - Ａ - Ｃ - Ａ] の構造を持つ。３回繰り返されるＡの部分は，手拍子のみである。ソプラノ, アルト, バスの３パートに分けられるので，３パートが合わさると，迫力ある演奏になる。Ａについては, 参加者全員が３パートのどれかに属することにした。Ｂ，Ｃの部分は手拍子だけでなく，足踏み，膝叩きのリズムが加わり，Ａの部分よりも難易度が高い。そこで生徒のみが担当する。つまり，保護者はＡの手拍子のみ，生徒は楽曲の初めから最後まで演奏に参加する。

なお，選曲にあたり，2014 年 9 月 29 日に丸森中学校での事前打ち合わせに於いて，丸森中学校２年生５名（男子３名, 女子２名), PTA 委員１名に対して, ワークショップでの指導も担当する大学生３名がこの楽曲を用いて約 10 分間の指導を行い，本ワークショップの教材として適していることを確認した上で，決定した。

2）第1回ワークショップ

（2014 年 11 月 13 日　13：20 ～ 15：20
　於：丸森中学校体育館）
参加者：丸森中学校第２学年生徒約 110 名
　　丸森中学校教員６名
　　宮城教育大学音楽教育講座小畑研究室５名

中学生を対象とした指導の回である。ソプラノ，アルト，バス，各１名ずつ大学生が配置され，中学生を指導する。それぞれの中学生がどのパートを演奏するかについては，２学年の教員と音楽係により事前に決められた。約２時間のワークショップの中で，パート練習と全体練習を行い（図２参照），最後の合奏では，Ａの部分については，ほぼ全員が滑らかに演奏するこ

とができた。B，Cの部分については，約５割以上が演奏することができた。

図2　パート練習，全体練習の様子（第1回ワークショップ）

3）第2回ワークショップ

（2014 年 11 月 28 日　13：50 ～ 14：50
　於：丸森中学校体育館）

参加者：丸森中学校第２学年生徒 108 名
（男子 57 名，女子 51 名）
丸森中学校第２学年保護者（PTA 委員を含む）56 名（男性２名，女性 54 名）
丸森中学校教員６名
宮城教育大学音楽教育講座小畑研究室４名

生徒が保護者に指導することを主とした活動の回である。生徒と保護者のグループ分けについては，できるだけ知っている保護者同士が同じグループにならないように，且つ，当日の手続きが煩雑にならないようにと，PTA 委員と何度も協議を重ねた。

１つのグループの人数については，約６名（生徒４，５名と保護者２，３名）の構成とした。生徒のソプラノ，アルト，バスのパートは，事前にそれぞれのパートごとで９グループに分けた。保護者については，受付順にソプラノ，アルト，バスに振り分け，PTA 委員が作成したカードを名札の下につけていただいた（図３参照）。保護者もそれぞれのパートが９グループに分かれており，生徒のグループ番号と保護者のグループ番号が一致した者同士が，同じグループとなる。

ワークショップは，まず中学生の見本演奏から開始した（図４参照）。生徒のほとんどがAの部分だけでなく，B，Cの部分についても演奏することができ，約２週間の間に生徒たちが練習したことが窺えた。その後，約 30 分間，各グループごとに生徒たちが保護者を指導した（図５参照）。その間，大学生は担当するパートのファシリテーターとして指導を行った。グループ練習の後，各パートごとに一通り楽曲を合わせ，

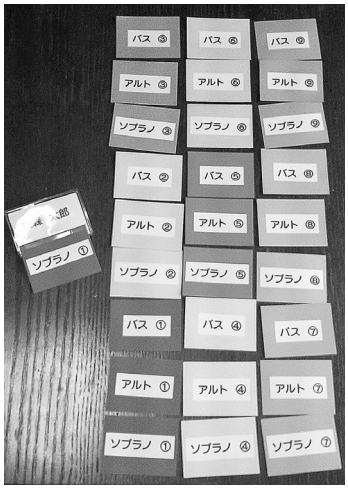

図3　PTA 参加者用の名札

図4　生徒の模範演奏（第2回ワークショップ）

最終的に生徒と保護者全員で演奏を行い，１時間のワークショップを終えた。

図5　グループ練習の様子（第2回ワークショップ）

3. 参加者同士の関わりについて

第２回ワークショップ後，当日参加した生徒 108 名，保護者 56 名にアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果と分析を以下に示す。

1）生徒のアンケート結果と分析

質問１「今回のワークショップ『みんなでボディパーカッション！』は楽しかったですか？」は第１回ワークショップ，第２回ワークショップを総合しての感想を問うた質問である。その結果，「とても楽しかった」に 45%，「まあまあ楽しかった」に 45%の生徒が回答しており，約９割の生徒がワークショップを「楽しかった」と感じたことがわかる（図６参照）。

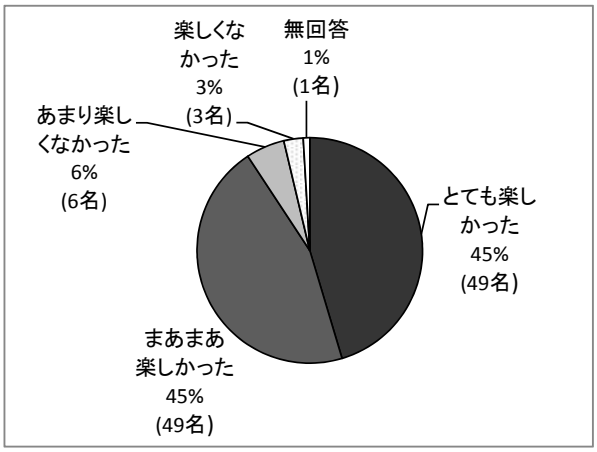

図6　質問1「今回のワークショップ『みんなでボディパーカッション！』は楽しかったですか？」

質問２「あなたにとって，今回のボディパーカッションは難しかったですか？」については，「少し難しかった」が 63 名（58%）と最も多く，「ちょうどよかった」と回答した生徒が 26 名（24%）であった（図７参照）。中学生を対象とした課題として，教材の選択は妥当であったと考えられる。

質問３「11 月 13 日『みんなでボディパーカッション！』から本日（11 月 28 日）までの間に，今回の曲をあなたはどのくらい練習をしましたか？」の質問では，平均 95 分（男子の平均 93 分，女子の平均 97 分）練習したという回答が得られた。練習した時間については，「音楽の授業」「帰りの会」などの記述から，丸森中学校の音楽教諭，２年生の担任教諭らの協力体制が窺える。さらに「帰りの会が終わってから」「放課後」

「友だちと休み時間に」「昼休みに」「友だちと教室で暇な時に」などの記述も多くみられ，かなり多くの生徒が自主的に練習したことがわかる。

質問４「本日（11 月 28 日）の『みんなでボディパーカッション！』では，友だちと協力して活動に取り組むことができましたか？」は，保護者も参加した第２回ワークショップでの同じグループの友だちとの関わりを問うた質問である。その結果，「よくできた」に54％，「まあまあできた」に 42％の生徒が回答しており，95％以上の生徒が「友だちと協力して活動に取り組むことができた」と自己評価していることがわかった（図８参照）。

質問５「本日（11 月 28 日）は保護者の方に積極的に指導することができましたか？」については，「よくできた」に 30％，「まあまあできた」に 49％，合計約 80％の生徒が，積極的に指導することができたと回答しており，多くの生徒が，保護者に対して積極的にコミュニケーションを図れたことがわかる（図９参照）。一方,「あまりできなかった」「全くできなかった」と回答した生徒も合計して約２割存在した。約 30 分の限られた時間であったことも要因として考えられるが，２割の生徒の中には，保護者とは積極的に関わることができずとも，友だちをサポートすることで保護者への指導に貢献した生徒も含まれることが，質問４の結果から推察できる。

質問６「本日，保護者の方に教えてみて，どのような感想を持ちましたか？」に対しては，「人に教えるってことは，とても難しいことだとわかった」「どうすれば相手にうまく伝わるか考えながら教えるのが大変だった。大人の人に教える側なので緊張したけど，がんばって積極的に話した」など，「難しい」「緊張した」という感想が他にも多くみられた。同様に「大人に教えるのは新鮮な感じで楽しかった」など「楽しかった」と書いた生徒も多かった。「初めて会った人でも，このような音楽を通して，すぐに仲良くなれて話せることが不思議で本当に楽しかった」という感想もみられた。

ワークショップ全体の感想としては，「みんなで息をあわせて１つのものを作りあげることのすばらしさを知った。またやりたい（女子）」「自分のパートを覚えるのがとても大変だったが，できるようになってく

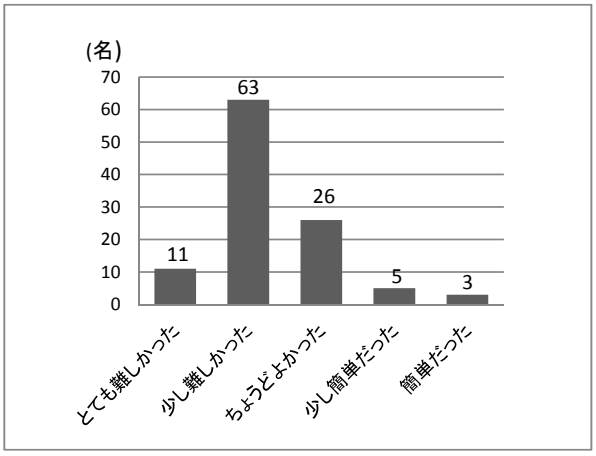

図7　質問2「あなたにとって、今回のボディパーカッションは難しかったですか？」

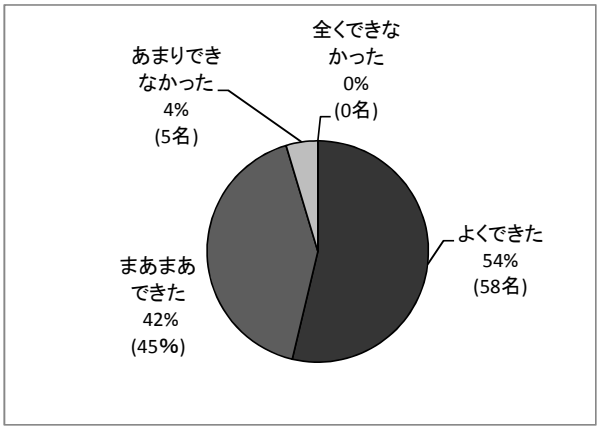

図8　質問4「本日（11 月 28 日）の『みんなでボディパーカッション！』では、友だちと協力して活動に取り組むことができましたか？

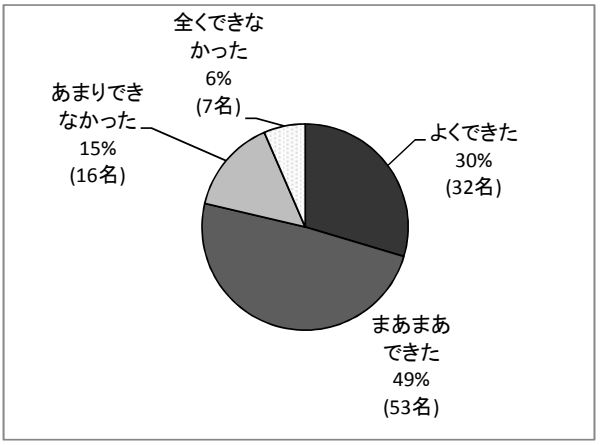

図9　質問5「本日（11 月 28 日）は保護者の方に積極的に指導することができましたか？」

表1　出身小学校別の保護者の参加率

出身小学校	A	B	C	D	E	F	G	H	I
参加した保護者（名）	19	13	9	5	3	4	0	0	0
出身の生徒数（名）	36	31	15	15	7	5	2	1	1
保護者の参加率	53％	42％	60％	33％	43％	80％	0％	0％	0％

るととても楽しくすることができた。完璧に間違えずにできたときの達成感はとてもあった（男子）」「体全体を使い，曲を奏でるのはおもしろかった（男子）」などボディパーカッションの活動そのものが楽しかったという感想が多くみられた。また本ワークショップの目的である参加者同士のコミュニケーションについて触れた感想も多くあった。たとえば，「親に教えるのに，自分たちが楽しくなった（女子）」「初めて会った人とでもリズムを合わせればすぐ仲良くなれるということも分かりました（女子）」「保護者同士だけではなく，友達同士もさらに親密になれた（男子）」「覚えるのにとても大変だったし時間がかかったけど楽しかったし，なによりも親と生徒はもちろん，親同士もとても仲が良くなったような感じがします（女子）」などの感想があった。

2）保護者のアンケート結果と分析

表１は，２学年の全生徒の出身小学校と，出身小学校ごとの保護者の参加率をまとめたものである（無回答３名を除く）。一概に参加率だけで積極性を測ることはできないが，出身小学校により参加率にかなりばらつきがあることがわかる。ただし，丸森中学校から各小学校への距離については，１キロ未満の小学校もあれば，10キロ以上の小学校もある。小学校を特定する情報になるため，ここに詳細を記すことはできないが，生徒の自宅から中学校までの距離も出身小学校により差があることも考慮しなければならないと思われる。

質問１「本日のワークショップは楽しかったですか？」に対しては，「とても楽しかった」に68％，「まあまあ楽しかった」に21％，合計すると約９割の保護者が「楽しかった」と感じたことがわかる（図10参照）。

質問２「あなたにとって，今回のボディパーカッションは難しかったですか？」に対しては，27名（48％）が「少し難しかった」，21名（38％）が「ちょうどよかった」と回答しており，保護者はＡの部分だけに限定しての演奏だったが，やや難しいと感じた保護者が多い結果となった（図11参照）。

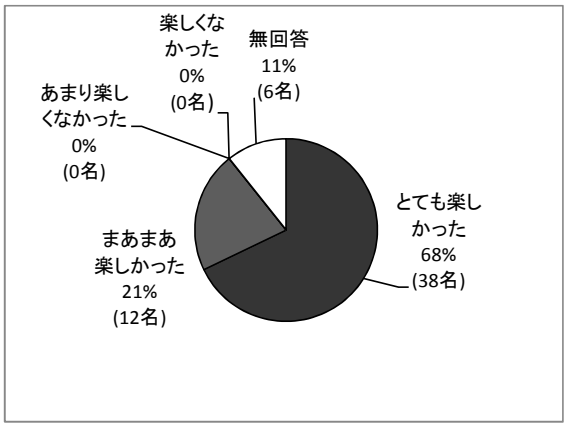

図10　質問1「本日のワークショップは楽しかったですか？」

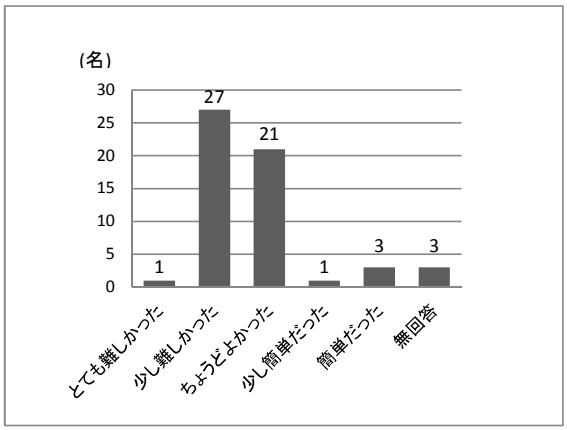

図11　質問2「あなたにとって、今回のボディパーカッションは難しかったですか？」

質問３「本日の『みんなでボディパーカッション！』で，今まで話したことのない保護者の方と話すことができましたか？」に対しては，「よくできた」に22％，「まあまあできた」に61％が回答しており，合計すると約８割の保護者が，今まで話したことのない保護者同士での会話がなされたことがわかった（図12参照）。

質問４「生徒さんに教わってみての感想をお聞かせください」に対しては，「わかりやすく」「丁寧に」「や

さしく」「親切に」教えてくれたという感想が多々みられた。また，「（生徒を）頼もしく感じました」「子供に教わる貴重な体験でした」「近くでカウントしてくれたり，わかりやすいようおしえ方を工夫してくれたり，保護者に寄り添ってくれるのがうれしかったです」という感想もみられた。

質問５「このような企画にまた参加してみたいですか？」に対しては，「ぜひ参加したい」に 25％，「機会があれば参加したい」に 61％が回答しており，約 85％の保護者が「参加したい」との感想を持ったことがわかる（図 13 参照）。他に，「どちらでもよい」と回答した参加者が５名，無回答が３名という結果となっており，「あまり参加したくない」「参加したくない」のいずれかに回答した保護者はいなかった。

全体の感想としては，「初めての体験でしたが，ハマりました。軽い運動にもなり，とても良かったです」「大勢ですると迫力もあり楽しい」などの感想に加え，

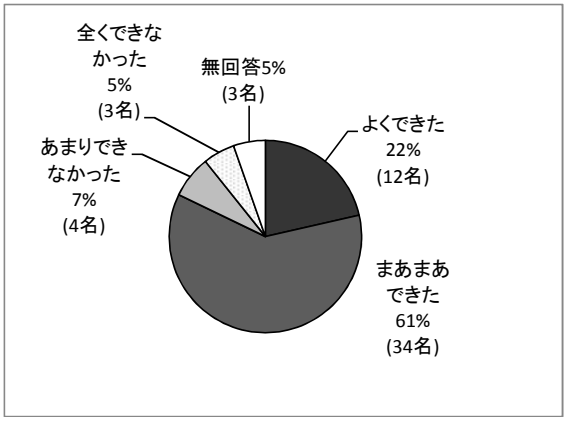

図 12　質問3「本日の『みんなでボディパーカッション！』で、今まで話したことのない保護者の方と話すことができましたか？

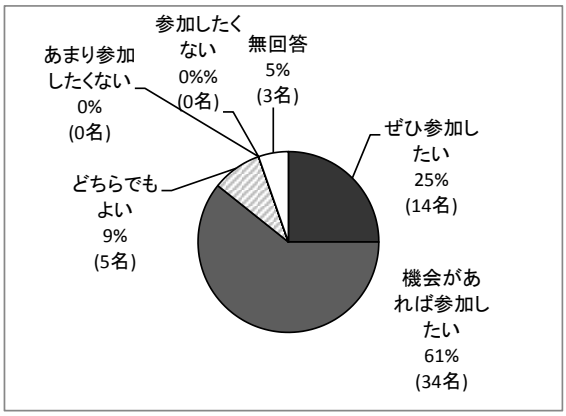

図 13　質問5「このような企画にまた参加してみたいですか？」

「始まる前は，ちょっとムッとした感じのお母さんがいたのだが，活動の中で同じグループのお母さんと笑顔でやっているのを見て，ホッとしました。」「（同じグループになった保護者に）次回会った時は『この間どうも』と話しかけやすいので，知り合いの輪が広がったと思います」という保護者同士の関わりを促進することができたと捉えられる感想もみられた。

4. おわりに

音楽を通して人と人とのコミュニケーションを促進させることは，音楽の普遍的な力といえるであろう。特にボディパーカッションは，コミュニケーション能力を高め，仲間意識を持ち，自己表現力を高める可能性をもつ活動である（保坂 2013）。今回のワークショップにおける生徒，保護者のアンケート調査の結果からも，充分にそのことが裏付けられる。

しかし，音楽を楽しむことのみに留まらず，今回のワークショップでは，参加者それぞれが主体的に関わることができたことに意義がある。生徒が保護者に指導する形態は，期待以上の効果がみられた。アンケート結果からは，保護者に指導したことにより生徒たちが自己有用感を得たと捉えられる感想が多々みられた。その相互作用として，保護者たちも生徒たちの姿を「頼もしく感じた」のであろう。そのような関わりは，約８割の保護者が，今まで話したことのない保護者同士で話すことができたこと，そして今回のワークショップへの満足感にも少なからず繋がったと考えられる。

わずか 30 分間のグループ練習の間に，参加者同士が上記のような関係性を築けたこと，自己有用感を得られたことは，中学校に出向いた我々が一方的に指導するスタイルでは難しかったと言わざるを得ない。丸森中学校の教員からいただいた感想の中にも，「教える・教えられるというコミュニケーションの楽しさを，私自身も改めて考えることができた」という記述があったことを紹介しておきたい。

東日本大震災からまもなく４年が過ぎようとしている。音楽による支援としても，参加者主体の，参加者自身の自己有用感を高められるような活動が今後はより求められると考えられる。音楽のみならず，芸術の力を活かした支援事例が蓄積されることを願ってやまない。

謝辞

ワークショップの実施，並びに本稿の執筆にあたり，丸森町立丸森中学校佐藤勝彦校長先生をはじめとする丸森中学校の先生方，丸森中学校第２学年 PTA 委員長斎藤百合子氏をはじめとする PTA 委員の皆様に多大なるご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

付記

本実践は宮城教育大学復興支援センターの支援を受けて行われたものである。なお，ワークショップの企画，研究の総括は小畑が担当し，ワークショップの実践については佐藤，水戸，山崎，菊地と共に行った。資料収集，アンケート調査結果の入力・集計，図表の作成については菊地，八木沼が担当した。

引用・参考文献・資料

白水晶子，山田俊之，日高三喜夫（2013）「児童におけるボディパーカッションの効果に関する基礎的研究」『久留米大学心理学研究』12　pp.98-105.

保坂淑子（2013）「小規模校における生徒の伸びやかな音楽表現力の育成―ボディパーカッションの導入による小集団表現―」『教育実践研究』23　上越教育大学学校教育実践研究センター pp.157-162.

星野圭朗，井口太編（1999）『子どものための音楽Ⅱ』カール・オルフ著　第３版
日本ショット株式会社 p.37.

「広報まるもり」宮城県丸森町発行
平成 19 年 11 月号　p.11.
平成 23 年６月１日号　p.7.